View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

氏　　名	劉（リュウ）　丹（タン）
学位の種類	博　士　（音楽学）
学位記番号	博　音　第 217 号
学位授与年月日	平成24年 3 月 26日
学位論文等題目	〈論文〉現代中国における琵琶教習プロセスの研究
総合審査委員	
（主査）	東京芸術大学　准教授　（音楽学部）　植村幸生
（副査）	〃　教授　（〃）　塚原康子
	〃　〃　（演奏芸術センター）　松下功

（論文内容の要旨）

本論文は、中国伝統楽器のひとつである琵琶について、主に中華人民共和国の成立から今日に至るまでの教習プロセスの変容過程を解明し、そのプロセスにおける伝承の諸問題を検討することを通して、現代中国社会に適した新たな琵琶教習プロセスのあり方を探ることを目的とする。

本論文は、序章「琵琶演奏プロ化の変遷」、第一部「現代中国における専門琵琶教習」、第二部「現代中国における一般琵琶教習」、第三部「琵琶教習の問題点と建議」、結論の五つの部分からなる。

序章では、本論文で扱う用語について説明し、琵琶演奏プロ化の変遷過程を19世紀以前、流派伝承における琵琶演奏、大同楽会と汪派、音楽専門教育機関の設立という四つの部分に分けて概観した。

第一部は三章から成る。第一章では、中央音楽学院における教習プロセスを三期に分けて論述した。模索期とも言える1950年から1965年までの第一期については、琵琶に対して「生糸から金属弦へ」「演奏者自身の爪からつけ爪へ」「品位が十二平均律順に」という三つの改造がなされたことを説明した。1973年から1980年代半ばに教習系統が確立した第二期については、一冊の教学綱要を基に当時の教習状況を分析した。第三期に当たる1980年代後半から現在までの発展期については、最近の教学綱要と期末試験順番表を分析した。

第二章では、他地域の音楽教習機関における教習プロセスの現状を中国と台湾という二つの節に分け、カリキュラムに焦点を絞って分析した。大陸の音楽学院で使用されるカリキュラムはいずれもほぼ同じで統一されていた。一方、台湾の専門教習については、大陸の場合よりも伝統曲を重視し、流派を尊重していることが明らかになった。

第三章では、中国独特とも言われる一貫したプロ育成の教育システムについて考察した。授業時間表の分析を通して、プロ育成を目指す音楽学院のカリキュラムでは、一般小中学校に比べて教養科目が少なく一般授業の時限数も少ないことを指摘した。

第二部も同じく三章から成る。第一章では、改革開放前の一般教習の状況について論述し、建国初期、琵琶が依然として一般大衆にまで普及しなかったが、文化大革命の時期に教習活動が盛んになったことを明らかにした。第二章では、改革開放政策によってイギリスから伝来した「考級」（アマチュア修習者に対するランク付け試験）における琵琶教習について考察した。その結果、考級における教習は一般教習であるにもかかわらず、専門教習に大きく影響されていることを明らかにした。また、考級の特長生制度やこれをめぐる社会問題についても言及した。第三章では、流派伝承における教習の現状について、筆者のフィールドワークをもとに考察し、流派伝承が存続困難な状況に陥っていることを明らかにした。

第三部は四章から成る。第一章では、現在の教習プロセスを「口伝心授」という伝統的な教習法と比較することによって、現在の教習プロセスにもなお伝統的な特徴が備わっていることを解明した。第二

章では、「外面」と「内面」という二つの視点から琵琶教習に存在する問題を指摘した。第三章では他の民族楽器と異なる琵琶の特殊性を述べ、さらに、第四章では教習プロセスの諸問題に対する解決策を提案した。

結論は、次の三点にまとめられる。第一に、現代中国における琵琶教習は西洋音楽を中心とする専門教習の導入によって全面的に変容した。その変容は「外面」と「内面」に分けて指摘することができ、外面的な変容として、①楽器の改造に伴う西洋化、②五線譜または数字譜の使用、③西洋音楽理論に基づく楽曲の創作、④練習曲の使用、⑤民族交響楽というオーケストラを模した合奏形式による演奏、以上の五点が挙げられる。そして、内面的な変容は、①修習者が民族音楽を軽視する認識の形成、②利益追求という修習目的の広がりの二点である。第二の結論として、琵琶教習システムは完全に西洋化されるまでには達しておらず、民族交響という演奏の形式も聴衆に受け入れられていないことから、琵琶の西洋化への試みが適切ではないことが指摘できる。第三に、内面的な変容は、西洋音楽を中心とするカリキュラムの使用と、一貫したプロ育成の教育システムに原因がある。以上の点を踏まえ、筆者は最後に、外面的な変容よりも内面的な問題を解決することが急務であると主張し、具体的な解決策を提案した。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、中華人民共和国成立（1949）以降の中国における琵琶の教習体系とその変化を、専門（プロ）と一般愛好者（アマチュア）の両面から検討し、その問題点を指摘した上で、今後に向けた提案を行うものである。

本論は大きく三部からなるが、それに先立つ序章「琵琶演奏プロ化の変遷」において、清朝末まで主に文人社会の男性によって流派ごとに伝承されてきた琵琶が、民国期以降、徐々にプロ化され、専門的な音楽教育機関の成立に至る過程を概観した。

第一部では、主として中央音楽学院における専門的琵琶教習の変遷と実状を論じた。同学院で展開した楽器の改造、カリキュラムの形成、楽譜の導入、幼少期からの一貫教育といった特徴は、中国全土の音楽学校の規範となったが、それが西洋音楽のシステムに由来することを明らかにした。その一方で、流派を重んじる台湾の琵琶伝承の影響が大陸中国にも部分的に波及したことも同時に示した。

第二部では非専門家の琵琶教習を取扱い、文化大革命期に琵琶が大衆化したこと、文革以降にグレード試験（考級）制度が一般化したことを述べ、考級制度の性格と問題点を論じた。考級はあくまで一般教習者向けでありながら、その内容は専門教習に大きく影響されていること、考級が大学入試の得点に関係するため弊害を招いていることを明らかにした。あわせて、大陸中国における流派伝承の現状を調査し、それがきわめて困難な状況にあることを示した。

第三部「琵琶教習の問題点と提議」は上述の議論にもとづき、琵琶教習の現状には、西洋化に由来する、琵琶音楽とその教習方法における様々な外面的変化と、それに伴う教習者側の内面的変化（民族音楽の軽視、利益追求主義）の両面があることを指摘した。そして、特に後者の問題点を解決するために、早期教育の見直し、伝統音楽とその文脈への理解、即興能力の涵養など、伝統的な教習体系に範をとる改革の必要性を具体的に提案した。

本論文は、執筆者自身の経験を踏まえながらも客観的に問題を提起し、現地での丹念な資料収集（文革期の教本など貴重な資料を含む）と的確なインタビューによって、琵琶教習の変遷と現状を鮮やかにレポートした。本論を通じて執筆者が提起した論点には、プロとアマチュアの関係、流派伝承の意味と将来性、楽譜と口頭性、無形文化財としての音楽、文革期における伝統音楽の動向など、中国伝統音楽研究における重要な問題が数多く含まれ、今後の議論を喚起するものとなった。用語法の問題、収集資料のより徹底した分析、他の楽器（二胡、古琴、古箏など）の状況との詳しい比較などが今後の課題と

して残されたものの、総じて独自性のある優れた成果を挙げたと認められるので、合格と判定する。